

平成 29 年度 第 3 回 認知症の人にやさしいまちづくりに関する有識者会議 議事要旨

1. 日時 平成 29 年 9 月 1 日 13 時 58 分～16 時 03 分

2. 場所 三宮研修センター 7 階 705 会議室

3. 議題

- (1) 「ご本人の声」について
- (2) 「介護している家族が困っていること」について
- (3) 本人と家族の声を踏まえた「認知症の人にやさしいまち」とは
- (4) 「認知症高齢者への声掛け訓練」の取組み（地域の力を豊かに）
- (5) 今後の進め方等について

(○=委員 ◎=オブザーバー ●=神戸市)

(1) 「ご本人の声」について

◎ (若年性認知症ご本人の発言)

- ・派遣社員として就労していたが、3 年ほど前から作業のスピードが落ちたり段取りがわからなくなったため病院を受診。軽度認知症と診断された。仕事を続ける意欲はあったが、上司から自主退職を勧められ、やむを得ず退職した。ハローワークへ行くも仕事は見つからず、決まったコースを歩くことを日課にしていた。
- ・ひょうご若年性認知症生活支援相談センターへ相談に行き、毎月 1 回同じ病気の方との交流の場に参加するようになったが、毎日開催されていないため、毎日通える場所を探していた。日課の散歩中に就労継続支援 B 型事業所を見つけ、現在はその事業所に週 5 回通所し、作業している。
- ・就労継続支援 B 型の作業所工賃では、利用料を払うとほぼ手元に残らず、また、さらに仕事をしたいという思いもあったため、雇用型である就労継続支援 A 型事業所へ体験利用に行った。
- ・作業内容的には問題なかったが、道に迷うため、通勤は家族に付き添ってもらうように言われた。しかし、家族の送迎は難しく、また、神戸市は通勤通所に移動支援サービスを利用できないため、断念した。助けてもらうことができず、残念に思う。
- ・当初は病気のことを隠すよう言っていた夫も、おひさま（神戸市社会福祉協議会主催の若年性認知症の方と家族を対象にしたサロン）へ通い、他の認知症の方や同じ立場の家族と接する中で少しずつ意識が変わり、理解してくれるようになってきた。今年の春には夫が企画し酒蔵めぐりに行ったり、アルツハイマー症協会の国際会議にも一緒に参加した。現在は、毎朝お弁当を作ってくれている。
- ・自分のペースにあった生活ができているので、今の生活が長く続くと良いと思っている。

◎ (若年性認知症支援者のコメント)

- ・(今回発表いただいた方は、) 社会と関わりたいという思いが強く、自身で居場所を獲得することができているが、若年性認知症の方は、自分で居場所を獲得することは難しいことが多い。

◎ (認知症高齢者ご本人) 初期集中支援チームが支援したケース。インタビューを実施。

- ・自分は病名を知らない（医師からは聞いていないと思っている）。想像はつくし、はっきり聞きたいとも思うが、聞いてしまうとがっかりして生きる気力がなくなってしまうのでは、と思い黙っておくほうがよいと考えるようになった。
- ・持病の薬の飲み忘れがあると薬局で指摘されたが、全く自覚がなかった。飲み忘れではなく飲むのが嫌で、自分で飲まずにとっておいた。
- ・財布を駅に置き忘れたことがあり、その際預金がなくなると言われたので銀行に届出をしたところ、一切の引き出しができなくなってしまった。口座振替も出来なくなり、水道ガス電気が止まってしまった。
- ・家賃滞納、ライフラインも止まり、室内にはお弁当のごみが散らかっている、という状態を住宅の管理センターが発見。あんしんすこやかセンターに相談し、認知症初期集中支援チームに繋がった。
- ・（認知症初期集中支援チームの同行により）病院を受診したところ、レビー小体型認知症と診断された。
- ・何をどこに置いたのかわからなくなってしまい、パニック状態になることがあり、こういったときは「うずが巻いている」ように感じる。この「うず」がなくなると調子が良くなる。
- ・独居で相談する人がいないので、病気で倒れてしまったら困る。道を歩いていきなり倒れたことが複数回ある。キーパーソンは夫の兄だが、本人は気兼ねがあり頼みにくいという。
- ・今住んでいる地域は（周りがサポートしてくれるため）、安心して住みつけられる。これからも住みつけたい。
- 独居の方が認知症初期集中支援チームに繋がり、生活を立て直したという今回のケースを見て、認知症初期集中支援チームはこういった方にとって意義の大きい事業だと感じた。
- ・本人は、（今暮らしている地域・環境について）「（認知症初期集中支援チーム員、あんしんすこやかセンターなど）周りの方がとてもやさしい」と信頼していることをよく口にしている。

## （２）「介護している家族が困っていること」について

- 資料５－１について説明
- 資料５－２について説明

### <質疑>

○お一人目の方のお話で出ていたが、働く意欲があってもなかなか働けないということは問題だと思う。受け皿となるような事業所として、どのような職種でどのくらいの規模で、どのくらい持続して働いているのか等教えてほしい。

⇒●（ご本人からの話に出てきていた）就労継続支援Ａ型は、雇成型であり、最低賃金が保障される。それに対しＢ型は、最低賃金は保障されない。また、通所には（世帯の収入状況によって）費用がかかる。事業所はＡ型Ｂ型あわせて市内に２００ほどある。

両制度とも障害者手帳が交付された方は利用できる。手帳の交付が受けられるかは、その方の状態による。今回の若年性認知症の方は、精神保健福祉手帳の交付を受けて就労Ｂ型を利用されたと思われる。認知症の方の手帳取得について、医療面での補足をお願いしたい。

○自立支援医療の利用のみのケースと、精神保健福祉手帳まで取得されるケースがある。

特に若年性認知症の場合は、（能力が下がってくるのは致し方ないが）就労したい、就労し続けたいという希望を持たれている方がたくさんおられて、その方々の就労支援をどうするかというのが大きな問題である。また、認知症は進行状態によって能力の低下が大きく変わり、若年性認知症の場合は特に進行が速いケースが多い。

働く意欲のある方については、受け入れられるような制度があっても良いと思う。

○A型からB型にかえる事業所が多いように思うが。

⇒●就労A型は最低賃金を保障する制度だが、3年間は国から補助が出るため、十分に就労ができなかったとしても、ある程度その方の賃金を保障することができるが、3年を超えた後に十分な就労とは言えない場合にその事業所での継続ができないケースもあり、国も注視している。こういったことも含め、働き方というのがいろいろと検討されているところである。

○（インタビューしていた）高齢の認知症の方は、独居になってから民生委員さんの訪問などはあったのか。

⇒○あんしんすこやかセンターと認知症初期集中支援チームが関わるまでは、公的支援があったとは聞いていない。

○今回インタビューしていた独居の高齢者の方のようなケースは、どのくらいあるのか。

⇒●平成27年度の総相談件数のうち独居は33%。平成25～26年度のモデル事業時は、総相談件数のうち独居は約44%であった。

(3) 本人と家族の声を踏まえた「認知症の人にやさしいまち」とは

●資料6について説明

<質疑・意見>

○論点整理の2つ目において、地域の範囲はおおむね中学校区となっているが、多くの場合、地域とはふれあいのまちづくり協議会単位のことが多い。同協議会は小学校区を単位としている。小学校区、あるいはふれあいのまちづくり協議会単位の方が連携しやすいと思うが、どうか。

⇒●ご指摘の記載について、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）が主体となった事業であったため、（ひとつの案として）あんしんすこやかセンターの圏域である中学校区と表記したもの。

⇒○地域の議論は不要では。「認知症の人にやさしいまち」という概念の話だと思う。具体的な対応の話などは最後に出てくるかとは思いますが。

⇒○神戸市全体をイメージしている。

○「認知症の人にやさしいまち」という表現は仮称でスタートしたのではなかったか。「～friendly」という言葉は「～に対してやさしい」と表現されるが、日本語の「やさしい」という言葉は、その人を「庇護する」「保護する」「擁護する」というニュアンスがある。

ご本人の声を聞いて、2つのポイントがあると思った。1つは、記憶を中心とした認知機能が低下することで、社会生活を営む上での機能が喪失してきて、その部分をどうカバーするのか。もう1つは、進行を遅らせる、あるいは残っているその人らしい部分をどう守るのか。「やさしい」という言葉を使う事によって、その人たちが持っている人間としての尊厳や、残されている機能を看過してしまうことになり、ミスリードされかねない。

庇護する対象というだけではなく、その人の持っている主体性というものをどう保っていくかという視点が、本当の意味でのフレンドリーということになるのではないか。

論点整理の中には、どれだけ庇護してあげられるかという主体ではなく、その人の持っている人間的な尊厳性や主体性、それを社会がどうリスペクトできるか、という視点が欠けているように思われる。

認知症の人たちの像を庇護一辺倒のニュアンスでとらえるのは適切ではない。

⇒○時点時点でその方の尊厳や残された機能を理解し、人間らしい生活を送れるように、という視点を盛り込む。

○論点整理の2つ目の方がもっとも大切なのは。まず、本人が尊厳の対象であって、そして、本人が住み続けたいと思うようなまち、という。順番の問題だが、○1つ目と2つ目を入れ替えて、そのうえで、先ほどの意見も盛り込んで行くほうが良いと思う。

○守ってあげる、だけではなく、十分理解し、サポートする人材育成という視点・理念を含めた条例に。この論点を整理し、お手元にお届けするので、加える点があればまたご意見をお願いしたい。

#### (4)「認知症高齢者への声掛け訓練」の取組み（地域の力を豊かに）

◎桃山台あんしんすこやかセンター

資料7について説明

##### <質疑・意見>

○あらかじめ声掛け対象となる認知症の方はわかっているのか。

⇒◎（桃山台あんしんすこやかセンター）

「高齢者役」というゼッケンを着用したり、服装だけを伝えたことや、完全にシークレットで実施したこともある。

○周知ができるという利点等あると思うが、シークレットにした場合とそうでない場合と何が違うか。声掛けができるかというのが気になるが。

⇒◎（桃山台あんしんすこやかセンター）

わかりにくかったのが、広報にもならなかった。訓練を地域でやっているということを周知するために、のぼりをもって実施したこともある。

○行方不明になったことを想定した訓練だと思うが、この訓練の方向性・目標はどこにあるのか。

日ごろから声をかけて、行方不明になった方がいるかどうかわからない状況でも声をかけて見つけましょう、という所まで想定しておられるのか、行方不明になったことを前提に声をかける運動をしようとしておられるのか。

⇒◎（桃山台あんしんすこやかセンター）

認知症の方が迷われたときに、気軽に声をかけていただけるような地域になったら良いということ。また、参加者からは「顔の見える、あいさつのできるまちづくり」が必要であると言われている。

⇒○大牟田はまち全体で、認知症で行方不明になっている方々をチェックして知らせるという仕組みができているが、出発点はどうだったか。

⇒●地域で行方不明になられた方がおられて、地域全体で見守る意識・体制づくりができないかということで、平成16年度から始められたと聞いている。長い期間をかけて実施してきたため、まちの中で認知症の方もともに暮らしておられるという理解をしていただける、という効果があった。また、当初から小学生に向けても認知症サポーター養成講座を行っていたので、受講した当時の小学生が高校生となり、高齢者の方や迷っている認知症と思われる方への声掛けが、大人よりもハードルなくできるようになったと聞いている。

⇒○小学生や中学生も参加していると。子どものころから教育してきた蓄積というものはないか。垂水区でもそのようなことは意識しておられるのか。

⇒◎（桃山台あんしんすこやかセンター）

現在、中学1年生を対象に認知症サポーター養成講座という形でさせていただいている。

○実際に行方不明になった者を見つけたような実績はあるのか。

⇒◎（桃山台あんしんすこやかセンター）

2件あると聞いている。様子がおかしいということで声かけをして警察に連絡し、無事家に帰ることができたと。

○認知症の方への対応は1対1が基本。多対一となることはパニックを招きかねない。こういったことを伝えていき、すべての方々にこういった意識を芽生えさせるということで、「認知症の人にやさしい」ということが自然にできるようになるのでは。また、顔のみえる関係を作ることによってコミュニティが育つのでは。

⇒○引き続き取組みを勧めていただき、神戸市全体へ広がると良いと思う。

#### （5）今後の進め方等について

##### ①事故救済制度について

○資料8-1について説明。

##### ②認知症初期集中支援事業運営関連部会について

●資料8-2について説明。

部会長として古和委員を指名。

○（古和部会長）

議事3（1）で紹介されたケースも初期集中支援チームのケースだが、3区に広がってから件数自体は伸び悩んでいる。チームを支えるための人材が育っていないこともある。どのように発展させていくか、議論していきたい。

##### ③イベント「WHO神戸センターと市民の健康を考える」について

●資料10-1について説明。

##### ④次回について

●10-2について説明。